

## 学びを核とした学校づくり

### —中条中学校・上里中学校の学校改革・学校経営実践報告—

Making school as collaborative learning community  
— A report on Chujo and Kamisato Jhs activities —

根 岸 康 雄\*  
Yasuo NEGISHI

庄 司 康 生\*\*  
Yasuo SHOJI

【キーワード】学校づくり 協同的学び 自尊感情 人権教育 同僚性

#### 【はじめに】

児童・生徒一人ひとりに学びを保障し、学び合う学び、協同的な学習、質の高い真正の学びを通して学校を民主主義と公共性に基づく学びの場として組織しようとする学校づくりの実践は、学校と授業を考える上で極めて大きな示唆を与える。埼玉県内でも多くの学校がこの取り組みを始めているが、学び合う学校と教室の理念を核として平成18年から現在まで取り組み続けている熊谷市立中条中学校、ならびに平成22年から現在まで取り組んでいる上里町立上里中学校の実践は、極めて貴重で大きな示唆を与えるものである。

本稿は、この2校の学びの創造としての学校づくり(学校改革)を校長として推進した根岸康雄とその改革を支援した庄司康生による実践の記録である。

根岸の教育観の根底には、自身の経験に基づく「教師の眼差し」についての深い洞察がある。特に中学生時代に教師に見守られ支えられ、教師の眼差しにより救われたという経験を持つ根岸は、教師の眼差しが子どもたちが安心して学ぶことのできる環境そのものと考え、それは自身の教師としての実践の中でさらに強まる。教師の眼差し、居方、子どもとのかかわり方は、子どもの生活と存在感、学びのあり様を決定的に左右する。教師が変わり、子どもが変わり、学校が変わる。この洞察は、校長となった根岸の5つの基本姿勢に集約されていく。これは根岸の教師としてのベースであり、学校教育目標・学校経営方針以前の教師としての思いとなっている。

根岸は、平成19年4月熊谷市立中条中学校に校長として着任し3年間、学校づくりを支えた後、平成22年に上里町立上里中学校に着任し、新たに学校づくりを推進してきた。両校の実践は、一貫した哲学と理念に支えられ、新しい学びをあり方を創造しつつ、質の高い真正の学びと民主主義的な関係性を生み出してきた。

#### 【協同的な学びとの出会いと中条中の実践】

ある教師との出会いが私・根岸（以下、「私」）を教師

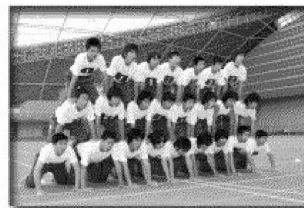
という職業に向かわせた。そこには、色々な悩みを抱えた自分をいつも見守ってくれている教師があったからだ。小学生時は気付かなかったが、中学生になると教師の眼差しを強く感じた。先生が見てくれているから一人ではないとの安心感が自分の支えとなり、中学時代を乗り切れた。つまり、この教師の眼差しで自分は救われた。教師の眼差しで子供は安心して学ぶ。この経験を生かし子供が安心して学び育つ学級を創る決意を持った。

教師となり日々子供と共に生活してい

#### 私の思い<5つの基本姿勢>

- ・子供が主役（初めに子供ありき）
- ・教師は授業で勝負する（一人一人の子供を大切に）
- ・学校が一番安全な場所（安心して学べる教室）
- ・子供が好き、子供も教職員も元気（子供の成長を喜び合う教師集団）
- ・地域の開かれた、わが母校上里中（自分を愛する学校を愛する地域を愛する）

く中で、この思いは更に広がった。自分の学級から学校全体へ、子供だけでなく教師も安心して学び輝く学校へ、そして、校長となった時には、先の思いは上記の5つに集約



された。これは、自分自身の教師としての基盤である。

私は平成19年4月校長として熊谷市立中条中学校に着任した。中条中学校は熊谷市中条地区の学校で同地区にある

\* 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター研究員

\*\* 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

中条小学校から全員が進学してくる伝統ある中学校だ。小中学校とも同地区の誇りとする学校で、文化の中心を担ってきた。そのため、地域の方々が学校応援団として協力を惜まず地域との関係や絆が強く太い。「菊と歌舞伎と熊谷ドーム」を合言葉に教育を推進していた。「菊」では、地域の方々がゲストティーチャーとして菊作りを指導し、「歌舞伎」では、毎年全校で歌舞伎鑑賞をするとともに、文化祭で生徒の手による「白波五人男」を実演する。体育祭は「熊谷ドーム」で毎年実施(保護者の協力で準備片付けを実施:現在は小学校運動会と地域の体育祭と中学校体育祭の合同開催)している。また、除草・除雪・校庭整備等地域の方々の協力が見事だ。中条中学校は平成18年度から学校全体で協同的な学び(学び合い学習)に取り組み始めた。前任の校長から「教職員自らが探り当てた取り組みであり、大切な内容であるので、継続してほしい」との引継ぎを受けた。

校長として着任する際に次の二つのことを

- \* これまで創り上げてきた先輩校長や教職員の努力と思いを大切に
- \* はじめに子供ありき  
「子供にとって」「子供のために」

大切にしたいとの思いがあった。4月当初の職員会議で印象的だったのは、「コの字の座席」の全クラス実施について、多くの職員の発言があったが、不安ではあるが実施しないことには「よい」のか「悪い」のか分からないから実施してみようと教職員が前向きに結論を出したことだ。教職員の情熱の中に「子供にとって」の視点で議論が進んでいることを肌で感じ、学校を前に進めようとする教職員の情熱を強く感じた。また、大きな手ごたえを得るとともに、前任の校長の申し送りをそのまま引継ぎ取り組むことを強く心に決めた。

そこで、まず初めにしたことは、校長自らがいち早く動き本気になって学ぶことだった。校長の学ぶ姿勢が、今まで苦勞をしながら中条中学校を創り上げてきた教職

#### ＜中条中学校での具体的な取り組み＞

- ・推進委員会を中心に校内研究組織を機能させる  
推進委員会の定例化(授業時間に位置づけ毎週開催)  
授業研究部 環境研究部 調査資料部
- ・学び合い校内研修の定例化(毎月一回を目標)  
指導者を招聘 公開授業と研究授業をセットで実施  
全職員が毎年数回は公開する
- ・全教員を先進校視察に計画的に派遣
- ・校内授業研究会を外部に積極的に公開  
授業研究会案内を市内小中学校に配布・HPで告知
- ・学校教育目標に副題を追加  
きき合い支え合い学び合い 心豊かにたくましく
- ・教育推進の柱を、「学び合い学習」と「豊かな体験」  
学びや体験を通して「人間関係づくり」を進め、心を育て、一人一人の学力を伸ばす教育を推進する
- ・熊谷市教育委員会研究委嘱(学習指導)を受ける  
平成20・21年度
- ・中条中の基礎基本を策定(含:教育に関する3つの達成目標)  
全教科で100%達成を目指す

#### ・人間関係づくりの具体的な推進

毎日毎時間の学び合い学習の中で(ケア・聴き合う)  
ラボラトリー方式の導入(ファシリテーター招聘)  
職員研修・生徒への直接指導  
PA(プロジェクトアドベンチャーの実践)

国立赤城青少年交流の家  
自分たちの成長が確実に  
体験できる(1・2年生)

#### ・マインドマップの導入

ブザン教育協会から16名のインストラクターの協力を受け全校一斉の講習会を実施  
授業やスピーチ、新年の抱負記入等日常の中で「思考、発想、整理、記録等」に活用



#### ・地域や保護者への積極的広報と連携強化

保護者への広報:学校便り、PTA総会や理事会  
地域の行事への積極区的参加等

員への敬意であり、教職員と共に歩むことの意志表明と考えた。こうして、協同学習関係書籍から学び、早い時期に先進校視察をすることで中条中学校での実践が始まった。次にしたことは、国や県、熊谷市の教育方針の中に自校の方針を論理的に位置づけること。そして3年間教職員と共に歩んだ。内容は枠内の通りである。

続いて、教職員と共に取り組んできた中での成果を以下に記す。

#### ＜生徒の変容について＞

他者との違いに気付き自己受容ができるようになり自己肯定感が高まり、他者をも受容できるようになった。

その結果として、

- ・生徒間トラブルや不登校が減少し、互いを大切にしようという関わり合いを持てるようになってきた。
- ・学ぶことの大切さを感じ、穏やかにかつ積極的に授業に取り組むようになった。
- ・「中条中の基礎基本」が定着し、学力低位の生徒が減少した。
- ・学習意欲の向上とよりよい人間関係の構築ができたことで「熊谷の子どもたちは、これができる！」の実践の充実が図られた。

#### ＜教師の変容について＞

授業研究会において、生徒一人一人の学びを協議の柱に据えて取り組んだことにより、生徒の成長を喜び合う教師集団となってきた。また、生徒の活動・学習意欲は生徒自身の自尊感情が欠かせないと感じ取ることができた。教師が生徒を見る眼差しも暖かくケアする視点となった。学習面については以下の成果があった。

- ・月一度の「学び合い」授業研究会では、生徒の実際の学習状況に注目した発言で研究協議の質が高まった。校外からの指導もあり、「学び合い学習」について、教師全体が理論的・技術的に高め合えた。その結果、

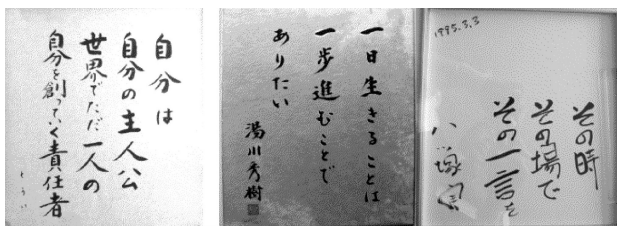


- 教師の指導力も高まり、また教師同士の絆も強まった。
  - ・課題を工夫し学習内容を明確にした授業が定着した。
  - ・校内授業研究会を公開し、市内・県内、また遠方の先生も授業研究に参加していただいたことにより活発な意見交換ができ、充実した授業研究会となった。
- また、特筆すべきこととして、教職員も生徒も決して一人にしない組織集団が育ってきた。

### 【上里中学校での実践】＜上里中学校の概要＞

上里中学校は昭和38年上里町(上里村)の統合の象徴として設立された。昭和58年生徒数増加のため上里北中学校が分離した。現在は普通学級15学級・特別支援学級18級3学級で合計18学級の学校である。3校の小学校から生徒は進学してくる。平成22年度からの5年間の生徒数の推移(5月1日現在)は、515名から始まり平成23年度が最小で508名、その後毎年増加し平成26年度は563名である。埼玉県北部の学校としては転出入が多く、時には十数名/年を数えた。

上里中学校の教育は、先人たちが丁寧に作り上げてきた。中でも、心の教育は埼玉県北部、特に児玉地区の教育として大切にされてきた。体育館脇の昭和43年卒業記念の石碑には、「人生二度なし 不尽」とある。「不尽」とは「礼を尽くし 場を淨め 時を守る」森信三先生の雅号である。森先生のほかにも、東井義雄先生、八塚実先生、作家の早乙女勝元先生、有正省三先生、宮澤省二先生等たくさんの実践家を上里中学校にお招きし、その教えを上里中学校の教育の中核とした。宮澤先生は上里中学校校歌の作詞者である。日本初のノーベル物理学賞受賞湯川秀樹先生の色紙は、修学旅行のおり、上里中学校教師が京都大学の湯川先生の研究室を訪問しその場で書いていただいたものであり、生徒のためにできることを精一杯実行しようとの教師の情熱の表れである。この他にも、たくさん色紙が残されている。生徒に対してお話をいただいたり、教職員に向け講話をいただいたり実践家の先生方が何度も上里の地に訪れ、心を耕していただいた。教職員は教育に対する情熱と心、子供への愛情等を基盤にしなが、森信三先生の言葉等を励みに、粘り強く教育に取り組んできたのである。これらのことが上里中学校の教育の根底に脈々と流れている。



教育とは流水に文字を書くような果ない業である。だがそれを巖壁に刻むような真剣さで取り組まねばならない。森 信三(実践人の家HPより)

しかしながら、様々な課題があった。昭和53年、上里町の保護司会が困難な状況にある子供たちを支援すべく「上里中学校地域ぐるみ協議会」を立ち上げた。地域の子供たちの教育を学校だけに背負わせるのではなく、地域ぐるみで子供を育て導くことが大切であると、立ち上ったのである。会は保護司をはじめとして区長・更生保護女性会・PTA役員等様々な団体の方々を中心として構成された。この取り組みは、まさに学校応援団の設立である。現在も上里町の二つの中学校にはそれぞれ地域ぐるみ協議会があり、地域の巡回、あいさつ運動等実態に応じた取り組みをしている。

### ＜上里中学校に着任して＞

平成22年4月に着任した私は、国・県・町の方針を踏まえたなかで、学校経営をしていくうえで3つの視点が必要と考えた。

1つ目は、前任の校長の方針と自分の方針を繋げること。ここには、前年度から在籍する教職員の取り組みに対する敬意が含まれている。「守破離」というように、繋がりなしに新しいことはできない。

2つ目は、1年を区切りとして教育を推進し、責任ある経営をすること。今ここで学んでいる子供たちと保護者、最善を尽くしている教職員、地域の方々にとって今がすべてである。

3つ目は、次年度を踏まえて2年・3年更に先を見据えて中期・長期展望に立って経営をしていくこと。

そこで、この3つの視点に立ちながら、上里中学校での5年間の振り返っていきたい。

### ＜平成22年度の取り組み＞○年度当初の取り組み

着任し、最初にしたことは、上里中学校を創り上げてきた教職員の誇り大切にすること。そのために、まずは上里中学校の取り組みのすべてを受け入れることの表明である。先生方が何を抛り所とし、考え、感じ、実践していることを先入観なしに受け入れること。学校教育目標はもちろんのこと、学校経営方針も変更しない。不十分に見えても、そのようにしている理由が見えない限り簡単には変えない。しかし、すべて前年通りという安易に見える方針の出し方をしたのは、校長としての責任は果たせない。学校経営方針以前のことで、教育に対する自分の考え方を表明することで、学校経営方針を踏襲する意味を理解してもらうこととした。

それは、前記述の「私の思い＜5つの基本姿勢＞」と、協同的な学びとを繋ぐ次の事柄である。協同的な学びの視点は、「私の思い」を別な言葉に直したものと考えている。これらは、教師としての構えである。どの様に子供を支え伸ばすかが教師の仕事である。この、子供を支

### 「学校は学びの場です」

学び続ける子どもは崩れないといえます。しかし、学ばせようと勉強勉強と言ってもなかなかできません。学ぶ環境を作ることが大切です。キーワードは、

### ＜信頼＞

生徒と生徒、教師と生徒、教師と保護者、学校と地域  
＜一人一人＞

教室での人数は1対40ですが、授業の中では一人一人への目配せが重要です。

える視点なしに教育手法のみの実践では、子供には入っていかない。教師の空回りになるばかりだ。そんな意味を込めて、上記事項と＜5つの基本姿勢＞を伝えた。

#### ○協同的な学びの導入への経緯

一学期間の取り組みにおいて上里中学校の課題が少しずつ見えてきた。教職員は自分たちの積み上げてきた取り組みに対して、誇りと自信を持っていた。特に前々年度、前年度、今年度を着実に指導の成果が表れ、生徒の生活や学習の様子が大きく改善されてきた。しかしながら、よく観察してみると、生徒自身の自尊感情や自己肯定感が低い生徒が目についた。教室に居るが授業に参加できない生徒、興味関心が校外に向いてしまっている生徒、あるいは登校できなくなっている生徒、これらの状況は学校生活や学びの中に希望を見出すことができず、希望を達成しようとする意欲がそがれてしまっていることの表れと受け止めた。小学校一年生に入学した子供たちは、「勉強することができる」「友達がいっぱいできる」と希望を胸に膨らませていたに違いない。それが学校生活をしていくなかで、少しずつ失われてしまったのである。教職員の努力の成果は着実に表れているが、現状から見えてくるものは、学校での取り組みが生徒一人一人の心の中まではなかなか浸透出来ていない事実である。希望を見失ったり見えなくなったりして困っているのは、生徒自身である。この事実を私たち教職員がしっかり受け止め、生徒の困り感に立ち学校として生徒への支援体制・指導体制を再構築していく必要があった。そこで、学びの共同体の理念に基づき協同的な学びを段階的に導入し、取り組むこととした。

#### ○校内研修会での宣言(平成22年10月25日)

上里中学校では、「一人一回研究授業」として教師全員が1年間に1回は研究授業を実施していた。この提案を良い機会ととらえ、協同的な学びについての学習会として校内研修会を実施した。理念の共有、指導案の形式変更、視察計画、指導者を招いての授業研究会の実施など今後の予定を確認した。この校内研修会の一歩のねらいは、校長の決意表明であり、事実上の新たな学校経営方針の明示である。それは、上里中学校が新たな方向に舵を切らねばならない必然性を教職員が理解すること。自校の課題を共通理解することであり、その改善のために学校が大切にしていこう内容を教職員一人一人が理解し、新たな一歩を踏み出すことであった。そこで、次の言葉(次項)を教職員に提示した。

ここでは、教職員にやってみようとの気持ちを持ってもらうこと。また、「分かりやすい授業」という表現を使った。これは、前年度からの踏襲で学習プロセスを大事にするとの意図がある。「初めは数分でよいのでグループでの学びを毎時間入れること。授業の視点が子供に移る(どう教えたかでなく子供がどう学んだか) こと」等の説明をした。だが、グループでの学習が従前の「話し合いの班活動」との違いなどをイメージ化することは難しいため、全教員が協同的な学びに取り組んでいる学校に視察に行くことで取り組みのスタートとした。

#### ＜はじめに＞

今、上里中の生徒は4つの基本・きれいな学舎・ひざつき清掃等で着実に自信と誇りを育てつつある。これは、教職員が一致団結し協力体制を築き日々の教育活動に取り組んだ成果である。学校は「学び」の場であり、「学び」によって希望を育む場でもある。したがって、一人一人の学びの保障する授業づくりをすすめて、「子どもは分かる喜びを感じ、教師は専門家として成長し、教職員、保護者地域の方々には生徒の成長を喜ぶ学校」＜保護者地域から信頼される学校＞として行く。

#### ＜分かりやすい授業をするために＞協同的な学びの視点を

- 生徒一人一人に寄り添い学びを見届け支援する。
- 一時間の中に「協同(小グループ活動)」を入れる。
- 分からなかったら訊く「ここどうするの」
- 対話のある授業にする。よく聴く・訊くもの・ひと・こととの対話
- 実物、絵、図、写真、小グループ、ペア
- 学習課題を分かりやすく
- 何をしたらいいのか・・・プリントや掲示
- 共有課題：グループでの個人作業
- ジャンプのある課題：グループ活動

視察から帰ってきた教員の中には「これくらいのことなら私たちにもできる」との感想もあった。そして、まずは試行錯誤でよいので授業をしてもらい、その中から、協同的な学びのへ取り組んだことによる生徒の変化を掴みとってもらうことにした。具体的には、指導案の中に上記の「分かりやすい授業をするために」の視点を明記してもらう。授業後の協議では、明記された内容を必ず取り上げるとともに、子供たちが学んでいる様子から先生方が取り組んでことによる成果を明らかにした授業の省察を心がけた。

#### ＜平成23年度の取り組み＞

本年度から学校教育目標達成のために、学校として本格的に協同的な学びづくりへの取り組みを始めた。本年度から新たに導入した内容は次の通りである。

#### ＜学校教育目標の視覚化＞

学校教育目標と関連した目指す生徒像を教職員が共有しやすくするために写真を活用した。

誰もが学ぶ学校(かしこく)



学び合い学習(協同的な学び)

心豊かな学校(やさしく)



あいさつ運動(学級委員会)

自ら進んで活動(たくましく)



そのボランティア活動(委員会)

**＜学校経営方針＞**

全職員が知恵を出し合い、基礎的・基本的事柄を大切にし、一人一人が主人公となれる学校づくりを推進し生きる力を育む。

**＜夢と希望＞**

**＜学びの創造＞**

学び合い学習  
よくきこく  
もったきこく

基礎・基本の  
確実な習得

朝読書に集中

**＜自信と誇り＞**

**＜上里中4つの基本＞**

靴をそろえる  
時間を守る  
掃除当番

きれいな学舎  
ひざつき清掃  
きれいな学舎

明るいあいさつ



## ＜二つの柱の学校経営方針＞

上里中学校の生徒に必要なことは、自尊感情や自己肯定感を高めることである。そのために、「夢と希望」「自信と誇り」二つの柱を明確に示した。

○「自信と誇り」＜活動させ褒め認め自己肯定感・自尊感情を高める＞ 「上里中4つの基本」は、前任の校長が掲げた内容で、森信三先生の「礼を尽くし 場を淨め 時を守る」を具体化したものである。この内容は、規則として守らせるといふより、心を育てるものとして職員が共有した。このように活動させ認め褒めることで、子供たちの心に「やればできる」「他の人から感謝される」「一人ではない」等との感覚を掴ませること、生徒自身が自分に「自信」を持ち「価値ある存在」であることに気付き、「誇り」を持てるようになることと確信したからである。このことが自尊感情等に繋がり、更には、学級・部活動・学校に対して、町県国へと「誇り」が広がっていく。その一例として「ひざつき清掃は上中の誇り」があり、これは、平成21年度の生徒作で、生徒会が引き継ぎ上里中学校の伝統になっている。

## ○「夢と希望」＜学びは夢を叶える希望の光＞

「学び続ける子は崩れない」の考えのもと大きな柱として掲げた。「夢を持たないからやる気が出ない」と言ったところで自尊感情に乏しく、学習や学校生活等に価値が見いだせなくなっている生徒には「夢を持つ」ことさえ困難となっている。そのような生徒には、夢を掲げる以前に、協同して学ぶことで、教室での居場所を作り他者となげ学ぶことの喜びやおもしろさを体験させ、自己理解を進め、子供たちの心に希望の火を灯すことが大切である。学校の中核は授業である。生徒は毎日5・6時間授業に取り組む。ここに居場所をつくり学びに参加させ、一人一人の学びを保障することが「学びの創造」の出発点である。この「学びの創造」を通して、生徒の心に希望の火を灯し、夢を持たせ、その実現に向かって進むことに繋げることが教師の使命である。

学びをつくるときは一人一人に視点を当てたい。分かれようとして努力をしたそのプロセスの中に「学び」があり「学ぶ喜びや価値」がある。また、協同的な学びの「ジャンプの課題」では、時には生徒の3分の1位の生徒が分かる課題が大切であるとされている。「課題ができること」と「本時の目標が達成できること」とは、同じでない場合がたたくさんある。また、一人一人の学び方はみな違い個性があるからである。その多様性の学びを大切にしながら学びを創りあげるために、「分かる」という結果を求める言葉は使わずに「一人一人の学びを保障するために」とし、生徒の学びに視点を明確に当てたのである。そのような「学びの創造」が大きなテーマであり取り組みの柱とした理由である。

## ＜協同的な学びの体制づくり＞

学校経営方針に示した「夢と希望」＜学びの創造＞・「自信と誇り」＜上里中4つの基本＞の二本柱には共通点がある。それは「自ら・自発的・能動的・協同」ということ。「ひざつき清掃」は自分で考えて取り組む「気づき清掃」

である。そして他者との協同作業でもある。「挨拶・靴揃え・時間を守る」の自発的な行為だ。学びも「自ら・自発的・能動的・協同」の中から生まれてくるものである。だから、学びと日常の行為を繋げた支援・指導体制とした。学びや日常活動は、生徒が「させられていると感じる」のではなく、「自ら進んで、自分の意志で取り組んでいると感じる」ことが大切であり、生徒が「自分を大切にしている行為」であり、「他者と共に成長する時間」であると位置付けた。



つまり、日常活動への日々の取り組みも「協同的な学びを中心に据えた学校としての取り組み」であり、組織体である学校の教職員としての取り組みである。そこで、「ビジョンの共有」と「機能する研修委員会」の2点について具体的に動いた内容について記す。

## ○「協同的な学びづくりのビジョンの共有」

学校経営方針の中で、二つの柱と共に、協同的な学びの理念「学校の使命・責任・ビジョン」、授業づくり方策、

### ＜協同的な学びを通しての学校づくり＞

#### 子どもにとって学びは希望

#### 1 全職員で共有するビジョンを持つ ＜学びづくりは学校づくり＞

次の3つをセットとして取り組む

- ① 子どもの尊厳、人格を大切に。どの子も平等に大切にすること（アラインメント）
  - ② 子ども一人一人の学びを保障する。一人残らず学びに参加させること（学びづくり）
  - ③ 教師全員が互いに学び合い、教育の専門家として成長すること（同僚性）→校内研修
- \* 教室において＜聴き合う関係＞に基づく対話的コミュニケーションを実現する。  
すべての授業に男女4人の小グループによる協同的な学びを導入する。

#### 2 授業の中で、必ず導入する内容「ねえ、こどうするの」が言える環境

- ・ 真ん中に空間のあるコの字型とする。・ 5分以上のグループ学習を入れる。
- ・ 1グループ4人が基本（基本は男女混合市松模様）  
グループの机はぴったりとつけさせる。
- ・ 共有課題（基礎基本的内容）とジャンプの課題（追究、活用、探求的な内容）

授業研究会の実施について具体的に提示（抜粋）した。

このとき、コの字型の授業形態について、強い反対があった。理由は、「せっかく学校全体が落ち着きつつあるのに、このような形態の授業では、おしゃべりが多くなり授業規律が乱され、授業が成立しなくなる恐れがある。努力して落ち着いてきたのに後戻りをしてしまう。この授業づくりは力のある教員でないとできないと聞いているので本校では無理である」など、誤解からの反対である。そこで、グループによる学習については必ず実施していくが、コの字の座席配置については、順次考えていくこととしてスタートした。

## ○機能する研修委員会と校内授業研究会

継続的に協同的な学びを追求していくためには、その中核となる機能する組織が必要である。そして、定例化する必要がある。そこで、授業時間内に、研修委員会を組み込み毎週実施できるようにした。毎週実施することで、各学年の推進状況の把握、先生方の抱えている課題や考え方等の把握ができる。理念や考え方を理解してもらう

機会とした。各学年で囁かれている取り組みに対する疑問を知り、それに答えることや協同的な学びに取り組む意味を伝えて、誤解の解消にも効果があった。各学年の研修委員に対して、学年を「〇〇」させなさいとの指示は極力避け、ゆっくりと裾野を広げることとした。

研修委員会で次の確認をした。御指導をいただいた指導者からの助言も生かし、授業研究会も充実してきた。

- ・学年研修と全校研修の二本立てで実施する年間9回実施
- ・全校研修会では指導者を招聘する
- ・生徒の学びの事実から学ぶ研究会にするため教員が観察するグループを指定する観察の視点を共有する
- ・研究協議の中でグループ協議を取り入れ協同的学びを体験する
- ・授業デザインの中に、協同的学びを進めるために工夫している内容を記入する

生徒も22年度23年度と落ち着きをもって学びに取り組める状況となってきた。教職員の学校評価では、「集会の参加態度・チャイム着席・あいさつ・学力の伸び等でとてもよくなってきている。学校力がついてきた。」「ひざつき清掃が定着」「気づき清掃を行う生徒も出てきた」等の意見が見られた。保護者評価も肯定的評価が平成22年度82%から平成23年度の86%へと上昇した。

上里町教育委員会学校教育課指導室長によるバックアップ体制も大きく影響している。協同的学びに対して様々な疑問や誤解、不安などがあったが、指導室長が機会を見つけては協同的な学びの推進の意味を教職員に伝えてくれた。取り組みの大きな自信へと繋がった。

#### <平成24年度の取り組み>

平成23年度において、協同的学びに対する誤解を完全に払拭できたわけではない。取り組みが深まってきたところで教職員が入れ替わる人事異動は、本校の大きな課題である。多い年には教師が13名変わった。転入してくる人の多くが協同的な学びを知らない。協同的な学びへの取り組みと、組織体の組織の一員として皆が同じ方向を向いて進む必要があることの理解を促すため、4月1日の着任日に転入職員を対象として、協同的な学びのオリエンテーションを行うことにした。私がプレゼンテーションソフトを使い、映像を見ながら理念と方策の紹介をした。研修委員会、授業研究会等の体制は前年度を基本として少しずつ改善しながら取り組みを進めた。

一学期から危惧していたことではあるが、二学期になり落ち着いた状況の学年が現れた。その学年では、集会や授業中での私語等様々な課題があったがより増幅してきた。その対応として、授業では複数教師による支援・指導体制を取った。協同的な学びの取り組みが、これらの原因と考え機と机の間を離し、グループ活動から離れる教師も出てきた。これらの考えに対して、研修委員会を中心として粘り強く協同的な学びの意義を伝えると

もに、生徒指導部会・教育相談部会等の総力を結集し課題のある部分を支援し、教員を一人にしない体制で取り組んだ。その成果は目に見える形で表れ三学期には着実に改善に向かった。しかし、課題も多く残る年度となった。

他の学年では、更に落ち着きのある学習や学校生活が送れるようになり、埼玉県が実施している「3つの達成目標」の結果も着実に伸びた。

#### <平成25年度の取り組み>

当年度の課題は、協同的な学びの理念の理解による日常化である。そして、「夢と希望」と「自信と誇り」の本校二大テーマの更なる



自己との対話

融合である。前年度の乱れは、ケアリングの意味を理解し日常の授業の中で実践していくことが不十分だったと感じたからである。つまり生徒の困り感に立った支援ができなかったのではないかということである。更には、「生徒自身が問いを持つ授業」を目指しきれなくて「生徒は教えたもらったことを覚える授業」となってしまっていたことも要因であったと思われる。そこで、年度スタートの職員会議の校長の所信表明で、明確に「夢と希望」(学びづくり)と「自信と誇り」(生活づくり)が理念の部分で綿密に結びついていること、生徒の困り感に立つこと(一人一人の学びの保障)、そのために学校生活で一番時間を費やす授業の中で子どもたちを大切にすること(ケアする、居場所をつくる、周りの生徒と繋げる、学んでいることを生徒一人一人全員に実感させるなど)を伝えた。

#### ○一人一回授業研究の取り組みの充実

研究主任が以下の方針を出し日常化に繋げた。

- ・5月から実施(昨年度までは10月から)
  - ・転入教師が授業の参考とできるように授業研究会を年度当初からスタート、研修委員が率先して5月に第一回目を実施
  - ・研修委員会の時間に行い互いに見合える授業へ
  - ・授業参観の次の研修委員会で授業を振り返り、授業者のみならず研修委員の資質の向上に繋げる
  - ・当年度より実施する町学力向上授業研究会で、会場校となる。この機会を活用し授業づくりをさらに推進
- また、上里町教育委員会では、教育長の方針として、町立中学校では学び合い学習を取り入れるとの表明があった。そして、平成26年度には校内研修の指導者招聘の予算化もしてくれた。

#### ○清掃部会として

清掃と学びを繋げる考え方を深める取り組みとして、昨年度から始めた清掃留学を6月に実施、清掃奨励賞「輝き賞」の共通理解を行った。また、新校舎が完成

#### <ひざつき清掃(気づき清掃)と学び>

「学び」も「清掃」も自らの意志での取り組みです。そこには、「対象(人・もの・こと)」との対話があります。対話の中から気づきが生まれ、気づきの中から対話が生まれ、気づきと対話で子供たちは学び育ちます。写真は雑巾がシンクロしながらペアで清掃をしています。清掃留学でも1年生と3年生がペアとなつての雑巾がけよく見られます。そして、一人でもしっかり清掃できるようになります。



し、旧校舎に感謝の意味を込めて最後の一日まで丁寧に清掃した。また、部活動の一環で「きれいな学びやプロジェクト」として、各部が活動目標を紹介するとともに学校をきれいにするボランティア活動を実施した。

このような取り組みの結果、生徒の規範意識の向上は目覚ましく学力も着実に伸び、課題の目立った学年も、一時登校出来なくなっていた生徒も学校復帰を果たす生徒が多くなり学力も着実についてきた。新入生であった一年生も学び合い学習に落ち着いて取り組めた。生徒アンケートからもそのことが分かる。保護者の学校評価の肯定的意見もさらに上昇した。



清掃留学 1年生と3年生



ペアになって

#### 生徒対象アンケート結果

- 1.グループの話し合いで、あなたは人の話を聴いていますか。
- 2.グループの話し合いで、あなたは意見を出していますか。
- 3.あなたは、わからないことを質問していますか。
- 4.あなたは、級友から聴かれたことにきちんと答えていますか。
- 5.学び合い学習は、授業内容の理解に役立ちますか。
- 6.学び合い学習（グループ）をすることで、学ぶことが楽しくなりましたか。
- 7.コの字の座席は、意見を聴いたりしやすいですか。（H25のみ）

<1年生の平均> 4段階評価で、高い評価は4～低い評価が1である。

質 問	1	2	3	4	5	6	7	全体
25年度	3.5	3.0	3.3	3.3	3.4	3.2	2.9	3.2

<2年生の平均>

質 問	1	2	3	4	5	6	7	全体
24年度	3.3	2.7	2.8	3.0	3.0	2.8		2.9
25年度	3.4	2.9	2.9	3.2	3.2	2.9	2.8	3.1

<3年生の平均>

質 問	1	2	3	4	5	6	7	全体
24年度	3.5	2.9	3.1	3.1	3.2	3.1		3.2
25年度	3.7	3.1	3.3	3.3	3.3	3.1	2.8	3.2

2年生では、2.4以下の生徒数が34人から16人と半減した。  
3年生では、3.5以上の生徒数が52人から73人に増加した。  
※2.4以下を低い評価、3.5以上を高い評価として捉えた。

#### <26年度の取り組みについて>

学校は組織体であるから、国・県・町の方針に基づいた学校経営方針の理念を共有し、各教職員が校務分掌や授業の中で実践していく必要がある。26年度人事においても、13名の教師が配置されたが、協同的な学びについてはほとんど知らない状況である。また、在籍教員でも、講義形式の授業からなかなか抜け出せない人もいる。ここを払拭する為には、校長のリーダーシップがより求められていると強く感じた。国は「アクティブラーニング」、県は「自助・共助・公助」をキーワードとして教育を推

「新しい酒は新しい革袋に」と言われるように形を変えることで意識を変えよう  
グループ学習を必ず取り入れる コの字での授業を行う  
4月中を目途にコの字にする。ただし、新任転入職員については、一学期末までに

進していく。町教育委員会教育長方針の中学校では学び合い学習を実施していく表明も受け、協同的な学びを深めるために上の事項を示した。着実に取り組みの成果が見えていることもあり、23年度当初のような反対は出されなかった。学校づくりの中核は二本柱だが、理念は一緒である。それを推進する母体は、運営委員会であり、各部会が具体的方策を練っていく。どの部会もみな大切だが、研修委員会について記す。

#### ○校内授業研究会を軸にした取り組み

先に記した課題と昨年度と同様の日常化が大きな課題である。克服のためには、教師が学び続け学校であること。当年度も研究主任が一人一回研究授業を5月からスタートさせた。その際、研修部会実施時間に授業を振り替え、研修委員全員が参観し教師が学び合う体制を計画的に作りあげた。まず、研修委員会の教師が率先して研究授業を引き受け昨年度より多くの一学期に8回の授業研究を進めることができた。研究授業とその振り返りを研修委員会で交互に行い、研修委員が生徒一人一人の学びを通して協同的な学びについて理解を深め、学年での推進者となった。学年研修・全校研修授業研究会を学期に学年一回ずつの合計9回計画しそのすべてに指導者を招聘し、その時々の課題を明らかにし取り組んだ。また、その中で、特に留意したのは「質の高い学びとなる課題づくり」と「校内研修会の研究協議の内容の充実」「次年度へのつながり」である。

・質の高い学び「課題づくり」

特に校内授業研究会では、提案授業が一つのサンプルやチャレンジであることを意識して課題づくりの支援をした。「本時のねらいと課題の間にはどんな意味があるか。」「教科の本質を追究する内容か。」「生徒が興味関心を高める課題か。」「ヴィゴツキーの最近接領域を意識したジャンプの課題か。」「生徒自身の問いとなることが出来るか。」先生方は汗をかきながら頭を捻って課題づくりを楽しんでいた。できるだけ事前に授業デザインを見せてもらい、上記の



教師の居方



授業研究会

内容を踏まえてアドバイスをした。放課後に有志の先生方を集め生徒役になってもらいしプレ授業を行う教師が増えてきた。そして、授業者がやってよかったとの手応えを持てるように支援した。

・研究協議の内容の充実について

23年度から研究授業の前に「教師一人一人の観察するグループを割り振る」「学びの事実に基づいてなどの視点を共有する」等確認し授業研究会に臨んでいる。「生徒の名前で・・・」「学びの事実を元に・・・」の協議はできてきたが、もう一つ深まりに不足していた。その折に、学びの共同体研究会スーパーバイザーの講師から「グループ協議」のあり方に課題があるとの助言をいただいた。「教師のグループ協議も、生徒の学びと一緒に、グループ内で考えを交流することで色々な見方や考え方と出会い教師自身の考えを深める場面だ。だから、グループ協議後の全体協議での意見交流も『自分はこのように観て、こう考え、これを学んだ』等自分の考えとして発言する事が大切、グループ内で交流したことで理解が深まり整理されてくるので自分の考えを言いやすいだろう。教師のこの様な協議体験は生徒も学びの疑似体験をしているのだから。(要旨)」これを踏まえ研修委員会において協議の在り方を再検討した。まだまだ教科の本質に至るまでの協議には届かないが、着実に生徒一人一人を主人公とした学びを見取る体制へと繋がっていった。

・いじめ防止プログラムの実施

埼玉県教育委員会指定により昨年度より取り組みを始めた。いじめの構造理解と子供たちの心情を理解し、いじめをなくす実践力を育てようとするものである。協同的な学びの中で、心を育てる実践となった。



いじめ防止プログラム

<取り組みの成果>

協同的な学びに対する5年前の教師の不安内容「お喋りが多くなり、授業規律が乱れ、学力が落ち、学校が荒れる」とは逆の落ち着いた柔らかな雰囲気为学校となった。どの生徒も、穏やかな眼差し互いを認め合いながら支え合いながら、学習や部活動、生徒会・委員会活動をはじめとして学校生活に前向きに取り組んでいる。多くの課題があった学年も大きく改善され、生徒間の関係もよくなり学年主任は「うちの学年はとっても男女間も仲がいいんだ」といい、生徒と先生方との関係もよく暖かな雰囲気の学年となり、不登校となってしまった生徒の多くが登校できるようになった。そして、保護者による学校評価の肯定的な評価も5年間下がることはなく25年度26年度は同じで最高の89%となり保護者からの信頼も得ることができた。これも、一人一人の子供に目を向け学びを中核におき、子どもの困り感に立ち支援し育てる視点、子どもの成長を喜び合い学び続ける教師としての教職員の同僚性、保護者や地域の思いや願いを大切にしたり取り組みの成果である。また、教師の活動に留まらず、生徒の活動として生徒会・委員会、部活動等を組織したこと

も大きな要因である。

この様に協同的な学びに取り組んだ8年間があった。その中で共に歩んでくれた教職員への感謝の思いと私の教師としての思いを下記に示す。

「学び」は「夢」を叶える「希望の光」です。私たちがケアしケアされ生きています。自分ではどうにもならない課題を背負っている子供も沢山います。また、課題を持たない子供は一人もいません。子供の困り感に寄り添いケアすることから教育は始めると私は思います。人は寄り添うことで双方向の言葉が生まれ、心の安定をもたらす学びに活動に取り組めるようになります。そして一人で行うときよりも多く深く学び、一人一人の違いに気づき人間関係の在り方（自助・共助）も学びます。

私たちは、教室を開き協同的な学びを組織し、質の高い真性の学びを求め共有課題・ジャンプ課題を研究し授業を創造し、未来を自分らしくたくましく生きる子供を育てる共に学ぶ組織体の教師集団です。

【両校の取り組み方の相違点と共通点について】

中条中学校の取り組みはボトムアップであり、教職員から学び合い学習への実践と提案が上がり、校長が追認しさらに次の校長へと継承した取り組みであった。上里中学校は、校長が指示し学校全体に広げたトップダウンの改革の形であった。動き方は異なるが、両校ともに大きな改革と、豊かな学びの創造という成果を得ている。

共通していることは、両校ともに子供の学びを中核に置きながら、子供の困り感に寄り添い支援し、その成長を喜び合う教職員の眼差しがある。また、その眼差しを共有し相互に理解し合う同僚性の深まりがあり、保護者や地域の方々との思い、願いの共有がある。さらに、この思いを教師の活動にとどまらず、生徒の活動として生徒会・委員会、部活動等を含め組織し、生徒自身の主体的な活動としての取り組みがあったことは特筆すべきである。

取り組みのはじまり方が異なっても、学校をつくり、生徒たちを主人公とする学びを創造する哲学と理念が明確であること、校長がそれを教職員と共有し学校の方向性を明確にすること、そして学びを保障する場としての学校の責任を校長が負い果たすことといった点で、校長・根岸と教師たちの実践の意義は共通である。学校はトップダウンであっても、ボトムアップであっても内側からしか変わらない、とも言えよう。

【おわりに】

本稿は、二つの中学校の学校づくり実践の報告であり、その取り組みを具体的に記述した。授業内での取り組み、授業以外の活動での取り組み、学校運営システムと校内研究会のあり方等、一つ一つの取り組みが有意義につながり連繫することにより「学校づくり」が進展する。これらの連繫とつながりの意味については、次の機会の考察において探求したい